

経済学博士 吉野俊彦 著

日本銀行史
第五卷

春秋社

＜著者略歴＞ 大正4年生。昭和13年東京大学法学部卒業と同時に、日本銀行入行。計算局・岡山支店・調査局調査役を経て、22年調査局内国調査課長、32年調査局次長、41年調査局長、45年理事。49年日本銀行を退任し山一証券経済研究所理事長に就任、その間、22年、26年には東京大学経済学部講師、36年経済学博士。

＜著書＞ 『インフレーションの経済学』時事通信社、『我が国の金融制度と金融政策』至誠堂、『円の歴史』至誠堂、『歴代日本銀行総裁論』ダイヤモンド社、『欧米金融視察旅行記』至誠堂、『日本銀行制度改革史』東京大学出版会、『日本銀行』岩波書店、『資本の自由化と金融』岩波書店、『忘れられた元日銀総裁―富田鉄之助伝―』東洋経済新報社、『経済成長と物価問題』春秋社、『銀行実務小辞典』春秋社など。

＜現住所＞ 千葉県市川市東菅野1-21-11

日本銀行史 第五卷

二〇〇〇円

昭和五四年二月二〇日 第一刷発行

著者 吉野俊彦

発行者 田中弘吉

印刷所 港北出版印刷

発行所 株式会社春秋社

東京都千代田区外神田二一八―六

電話 東京〇三三三九六一(代表)

振替口座/東京 〇一四六二二一〇一

第五卷への序文

昭和三十年から昭和四十八年まで日本銀行の行内誌である『にちぎん』に連載した「やさしい日本銀行史」を改訂して『日本銀行史』五巻に編成する作業は、本巻の刊行を以て終了した。第一巻第一刷の刊行が昭和五十年十一月であったから、ここに至る迄満三年を経過し当初の計画が著しく遅延したことをまず深くお詫びしなければならぬ。日本銀行を退任すれば、もう少し時間の余裕ができ、改訂作業もそれ程時間を要しないであろうと予想したのが抑々の誤まりで、退任後毎日多忙を極める生活が続き、引用文を原典と照合する時間を十分割くことが不可能だったことが最大の原因である。しかしつかれた身心に鞭打ち、とにかく『日本銀行史』刊行の第一期計画だけでも完了の運びになったことは、著者としてまことにうれしく、この間あきもせず支持を惜しまれなかった読者諸君に対し、此の機会に心からお礼申し上げる次第である。

思えば、日本銀行史編纂と私との関係は随分古い所から始まっている。まず第一回の機縁は、昭和十七年旧「日本銀行条例」と「兌換銀行券条例」が廃止されて現行の「日本銀行法」が制定された際、時の結城豊太郎総裁から岡本兵太郎調査局長を通じ、旧「日本銀行条例」時代六十年間の日本銀行史執筆を命ぜられたことであった。この作業は終戦直前迄丸三ヶ年を要し、一応「日本銀行六十年史稿本」は出来上がったが、戦局苛烈を極め、印刷製本共に不可能となり、公刊されることは取り止めとなった。

第二回は、昭和三十七年日本銀行が創立八十周年を迎えた際、時の山際正道総裁から直接至急八十年史を公刊するにつき、その執筆を命ぜられたことであった。総裁の命令がでたのが前年末で、昭和三十七年十月十日開業記念日までに刊行を完了せよというのであるから、随分と忙しい日程を組まなければならなかったが、調査局や史料調査室の諸君に各論の執筆を願ひ、私は総論に当る第一章「日本銀行の沿革概観」を執筆することで、漸く原稿が完成し、期日迄に行の内外に『日本銀行八十年史』を配付し得たのは幸であった。

第三回は、来る昭和五十七年いよいよ日本銀行が創立百年を迎えるに付き、去る一月三十日付けを以て日本銀行百年史編纂委員会の委員を委嘱されたことである。元来日本銀行の年史は、現役の日本銀行員が編纂すべきもので、OBがこれに関係するのは適當でないという理由で固辞したにもかかわらず、過去の経験を基に意見だけ述べてくれればよいという日本銀行当局の要請によりお引受けする仕末となったが、これにより、今は幻となつた六十年史の編纂事業迄加えると、二十年に一度ずつ私は日本銀行の正規の歴史編纂に参加するわけであり、今更の如く日本銀行史と私との因縁のようなものを感じずにはいられない。

なお日本銀行の金融政策を中心にした歴史ではないが、事務の沿革をまとめた『日本銀行沿革史』は明治以来今日に至る迄数回に互り編纂されており、そのうち昭和三十七年九月刊行の『日本銀行沿革史第三集』第一編総説第一章「経済金融の一般情勢」と、昭和四十一年六月刊行の『日本銀行沿革史第四集』第一編総説第一章「経済金融情勢概観」とは、私の執筆に係るものである。これに加え、日本銀行調査局編『日本金融史資料明治・大正編』第八巻、第九巻に収められた日本銀行半季報告の解題中に含まれている「日本銀行半季報告の分析」(第一回―第四十七回)(第四十八回―第八十九回)と第十巻、第十一巻に収められた日本銀行営業報告の解題中に含まれている「日本銀行営業報告の分析(明治二十一年―明治三十八年)(明治三十九年―大正十五年)、日本銀行調査

局編『日本金融史資料昭和篇』第五巻に収められた日本銀行半季報告・日本銀行營業報告・日本銀行事業年度事業概況の解題中に含まれている「半季報告營業報告事業年度事業概況の分析」も、私の執筆に係るもので、このような形で日本銀行の正規の歴史あるいはこれに準ずる刊行物の中に名を残し得たことは、歴史に志した私にとって終生忘れ得ぬ光榮である。

さて、昭和金融恐慌後の日本銀行の歴史について、これ迄と同様の方法で執筆することを、第一巻の序文でお約束しておいたが、先にも述べたような多忙な状況が続く限り、早急にはとても無理なので、他日閑暇を得た時にといいことで留保し、取り敢えずは、百年史編纂委員会の委嘱委員として母行の正規の歴史編纂につき私見を述べることでお許し願いたい。

最後に、私の日本銀行退任直前の昭和四十九年一月の『にちぎん』に載せられた「やさしい日本銀行史」完結までと題する座談会記事を、本書の巻末に添付し、第一期計画終了の御挨拶に代えさしていただきたいと思います。

昭和五十三年十月一日

市川東菅野の書齋にて

吉 野 俊 彦

目次 ■ 日本銀行史 第五卷

第五卷への序文

一六七	大正九年における恐慌の勃発	三〇
一六八	大正九年の恐慌に対する日本銀行の態度	三三
一六九	大正九年の恐慌の性格	三七
一七〇	大正九年の恐慌と預金取付け	三九
一七一	大正九年の株式恐慌と日本銀行の特別融通	四一
一七二	大正九年の商品恐慌と日本銀行の特別融通	四三
一七三	日本銀行特別融通についての評価	四九
一七四	国際会議における国力の背景	五〇
一七五	第一次世界大戦後における国際収支の逆調と日本銀行の警告	五九
一七六	大正九年の恐慌後における預金取付の頻発	六五
一七七	大正十一年における国庫預金制度実施	七〇

一七八	大正十二年における関東大震災と金融界の混乱	九六
一七九	関東大震災と日本銀行の被害	一〇一
一八〇	関東大震災と日本銀行員の奮闘	一〇六
一八一	関東大震災とモラトリアム	一〇一
一八二	日本銀行震災手形割引損失補償令	一〇七
一八三	日本銀行の震災手形割引	一〇三
一八四	震災手形以外の日本銀行の特別融通	一〇六
一八五	関東大震災後における国際収支の逆調激化	一〇四
一八六	大正十三年における事実上の平価切下げ	一〇〇
一八七	九代総裁井上準之助	一〇五
一八八	井上九代総裁再説	一〇五
一八九	井上九代総裁三説	一〇六
一九〇	井上九代総裁四説	一〇六
一九一	井上九代総裁五説	一〇六
一九二	井上九代総裁六説	一〇九

一九三	井上九代總裁七説	一〇七
一九四	日本銀行開業九十周年を迎えて	一〇三
一九五	大正年代における公定歩合の変動	一〇八
一九六	大正年代における金融政策の目的	一〇四
一九七	大正年代における日本銀行半季報告と營業報告	一〇〇
一九八	大正末年における日本銀行の内部構成	一〇六
一九九	大正年代における支店網の拡充	一一三
二〇〇	昭和年代に入る	一二八
二〇一	昭和二年の金融恐慌	一二四
二〇二	昭和二年金融恐慌の背景	一二九
二〇三	震災手形の整理過程	一二五
二〇四	片岡直温大蔵大臣の失言問題	一二二
二〇五	昭和二年三月における第一次動揺	一二四
二〇六	昭和二年四月における第二次動揺	一二五
二〇七	モラトリウムと日本銀行特別融通及損失補償法	一二五

二〇八 筆を擱くに臨んで 二〇三

■あとがきに代えて■

「やさしい日本銀行史」完結まで

——吉野俊彦理事を囲む座談会—— 二〇九

一六七 大正九年における恐慌の勃発

反 動 来

大正八年下半年以降、日本銀行のたび重なる警告を無視して、企業の濫設、銀行信用の過度の拡張が行なわれた結果、物価は著しく上昇して、海外諸国に比べ割高の度合いがひどくなり、思惑的な輸入が急増しました。一方輸出は、ヨーロッパ主要諸国の生産力回復と日本の物価の割高により不振を続け、これを反映して、大正九年一月以来貿易収支の赤字幅は拡大し、一月の赤字二千八百万円から、二月は九千六百万円の赤字となり、さらに三月には一躍一億三千五百万円という驚くべき赤字が記録されるに至りました。このため、市中為替銀行の外貨の手持ちは減少し、約一億円の在外正貨の払下げを受けなければならなくなりましたが、このような経路で年初わずか三カ月の間に、巨額の通貨が収縮した事実は、金融市場に大きな衝撃を与え、財界不安の色は濃くなり、もはや好景気が続くことはとうてい期待できない状況となりました。

はたして、井上日本銀行総裁の警告演説が行なわれて以来、さして時間のたっていない大正九年三月十五日、東京、大阪株式市場において、株価は突然暴落を始め、これをきっかけとして、みぞうの大反動が生じたのです。東京株式取引所新株は、大正九年三月の高値五四五円であったものが、十五日には三九九円に暴落し、東京株式

取引所では十六日、十七日の二日間臨時に休会し、かろうじて整理を行なうという状況でした。

四月七日に至って、大阪の増田ビルブローカー銀行の破綻暴露を契機として、再び株価の大暴落が起こり、東京、大阪の両株式取引所とも立会いを停止し、十三日によりやく再開したところ、またまた株価が暴落して手がつけられなくなり、結局、四月十五日から翌五月九日まで長期間にわたって再休会を行ない、ようやく解合とちあひという惨たんたるありさまになりました。

このような株式市場の動向と並んで、綿糸、生糸、銅、鉄、砂糖、米などの商品市場においても、相場の崩落現象が生じ、取引の混乱がはなはだしく、新規の商談は皆無になってしまいました。

日本銀行調べの東京卸売物価指数の推移を見ると、大正九年三月に四二五であったものが、六月には三二七、十二月には二七二と、想像もつかないくらい急落を示しています。このうち、生糸だけをとりだしてみると、大正九年一月の五二〇から六月の一八二に、また、綿糸は大正九年三月の七四四から六月の三七六へと、まさに恐慌相場になっていることが注目されます。

したがって、企業の破綻は、いたるところに続出し、日本銀行調べの計画資本も、大正九年三月に十一億四千万円を越えたものが、六月にはわずか一億六千万円、十二月には一億円に激減し、さしに熱狂した企業熱は、完全に消え去ってしまいました。これまで何度も引用した井上総裁の『戦後に於ける我国の経済及金融』は、この間の事情を次のように表現しています。

其騒ぎはどんな騒ぎであつたかと云ふことを一つ申し上げますと、大正三年に戦争の始つた頃にも非常な騒ぎを起しましたが、併しかながら其騒ぎは外国に關係して居る商売人ばかりでした。大正七年の休戦の時の反動も、稍々範圍は広がったのでありますが、それでも大正八年後の空景氣を受けた後の大正九年の状態とは非常に違つて居りました。大正九年の時はい

本全国一時暗黒になったのであります。それでどうであつたかと云うと、総ての取引所と云うものは皆停止しました。株式取引所を始め、荷も売買する市場と云うものは総て閉鎖してしまひました。それから綿糸とか、生糸とか、地方の機業とか云ふやうなものは、皆仕事を廃めて閉鎖して数十日の間は何もせずに、唯々茫然として天も仰がなかつたかも知れぬが下を俯いて情ない顔をして居つた訳であります。（井上準之助著『戦後に於ける我国の経済及金融』、六六―六七頁）

実体面の動きがこのように深刻なものであつたので、金融面においても、著しいひつ迫症状が生じたことはいうまでもありません。大正八年中を通し、戦後の変態的景氣に眩惑されて放漫な貸出増加を続けてきた市中銀行も、その貸出が固定し、手元が著しく窮迫を告げるにおよんで、にわかに警戒を嚴重にしたため、金利は上昇し、大正九年の年初最低二錢四厘くらいであつた手形割引歩合は、三月にはいつて一躍二錢九厘くらいにハネ上がり、ピークでは三錢五厘くらいを唱える場合もありました。しかも、すでに述べたように、三月中旬の株価暴落を端緒として、もろもろの商品相場が一斉に激落を示したこともあり、市中銀行の警戒的態度はいよいよ加重され、次いで四月五日に、大阪の増田ビルブローカー銀行が手形の交換じり決済のための入金をおくらせ、七日にはついに決済不能の事実が伝えられるや、これをいや氣して株価は再度下落し、これが逆に企業の信用の欠乏をきたし、金融ひつ迫の傾向はますますはなだしく、互いに因となり果となり合つて、財界全般の動搖に拍車をかけることになりました。

このようにして、金融市場は四月上旬以来恐慌状態となり、五月二十四日には横浜きつての貿易商であつた茂木合名の破綻につれ、その機関銀行である七十四銀行が休業を発表するに至つて、形勢はしだいに悪化の一路をたどり、四月以降四カ月間に預金の取付けを受けた本店銀行六十七行、支店銀行百二店、計百六十九店の多きにおよび、そのうち休業を余儀なくされたものは二十一行を数えました。

日本銀行營業報告の記す恐慌状態

ここに述べたような恐慌状態を、当時の日本銀行營業報告（大正九年分）がどのように把握していたかを、次に紹介してみよう。

曩ニ休戦後一時頓座ヲ来シタル 内地財界ハ一昨年（筆者注一 大正八年）五六月ノ交ヨリ再ヒ殷盛ヲ見ルニ至リ 投機熱ノ勃興ハ昨年（筆者注一 大正九年）当初ニ及ンテ其極ニ達シ 物価倍々奔騰シ 諸商品ノ思惑取引熾烈ニシテ 生糸ハ上一番四千參百円台ヲ唱ヘ綿糸相場ハ將ニ当限七百円台ニ達セントスルノ氣勢ヲ示シ 株式市場亦空前ノ活躍ヲ見ルニ至レリ而シテ事業ノ創設拡張ヲ計画スルモノモ亦愈々多ク一月以降四月迄ニ其金額實ニ參拾七億貳千万円ノ巨額ヲ算シタリ

以上は恐慌直前の叙述ですが、これからあとは、いよいよ大正九年の恐慌状態に移つてゆきます。

然ルニ我外国貿易ノ情勢ヲ觀ルニ 海外ノ諸邦ハ戦後漸次購買力ヲ減シタルカ為メ 戦時中持續シタル輸出超過ハ一昨年来入超ニ変シ 財界ハ業ニ已ニ其好景氣ノ原動力ヲ欠如セルニ拘ラス斯ノ如ク異常ノ活況ヲ来シタル所以ノモノハ 蓋シ數年来ノ情勢徒ラニ市場ノ人氣ヲ煽惑シタル結果ニシテ 到底永続スヘキモノト觀ルコト能ハサリシ所ナリ 是ヲ以テ本行ハ一意市場ノ警戒ニ努メタリト雖モ 財界ハ遂ニ之カ反動ヲ見ルニ至レリ 東西株式市場ハ三月中旬一度暴落シ 四月上旬再ヒ崩落シテ遂ニ立会ヲ休止スルニ至リ 之ヲ導火線トシテ市況倏チ混乱 各種商品ノ暴落ト共ニ 貨物ハ停滯シ金融ノ梗塞甚シク 各方面ニ互リテ 事業ヲ中止シ 又ハ其整理ヲ必要トスルモノ 簑出スルニ至レリ 斯クテ全国ニ散在セル各種ノ機業モ 一時ハ全ク其操業ヲ休止スルニ至リ 生糸ハ當時專ラ思惑ニ因リテ 法外ノ高値ヲ維持シ来リタルモノナルヲ以テ 果然相場ハ暴落シ 定期市場ハ一時其立会ノ休止ヲ見タリ 綿糸ニ至リテハ 投機取引最モ熾ニシテ 禍根既ニ深ク 隨テ其反動モ亦急激ニ 全部ノ取引悉ク其受渡不可能トナリ 紡績業モ茲ニ操業ヲ短縮スルノ已ムナキニ至レルカ 其他各種ノ商品何レモ打撃ヲ蒙ラサルモノナク其取引ハ著シク困難ヲ極メタリ

ここまでは株式市場と商品市場の崩壊状態を述べているわけですが、以下は貿易と金融の分野における困難な状況にふれた個所です。

加之對外貿易ニ於テハ 前年来ノ好景氣ニ連シ 思惑註文^{すくな}カラサリシカ 是等ハ年初以來 陸続トシテ輸入セラレ 三月中ノ如キ 將ニ參億參千万円ノ多額ニ達セントスルノ有様ナリキ 然ルニ偶々^{たま}財界ノ動搖ニ際會シ 輸入既約品ニ對スル註文ノ取消又ハ転売ヲ行フモノ続出シ 一方輸出ニアリテハ内地市価ノ暴落ノ為メ 到ル処引取困難トナリ 随テ貿易業者中多大ノ滞貨ヲ抱擁シテ資金ノ梗塞ニ苦ムモノ 相踵^つクニ至レリ 又金融界ニアリテモ横浜七十四銀行ハ 經營其途ヲ失シ 遂ニ其窮狀ヲ暴露シテ 仕払停止ヲ為セルカ 其結果各地ノ銀行中 預金ノ取付ニ遭遇シタルモノ尠カラス 三ノ小銀行ハ為メニ仕払停止ヲ為スニ至リ形勢漸ク渾沌 一般金融界ハ恐怖ノ念ニ驅ラレタリ

一六八 大正九年の恐慌に対する日本銀行の態度

經濟界からの救済要請

大正九年の恐慌は、前回に述べておいたとおり、きわめて深刻なものであったので、經濟界から政府と日本銀行に対して救済を求める声が高まりました。ここでは、その代表的なものとして、大正九年五月二十四日から二十六日まで三日間東京商業會議所で全国の八つの商業會議所の協議会を開いた結果決議した政府に対する要望事項を紹介してみよう。

- 一、財界ノ現状ニ鑑ミ公債政策ヲ適當ニ調節シ以テ金融ノ円滑ヲ図ルコト
- 二、中央銀行ヲシテ極力市中銀行ヲ援助セシムルノ方針ヲ定メ 市中銀行ヲシテ安シテ確實ナル貨物証券有価証券及商業手形ニ対スル融通ノ任ニ当ラシムルコト
- 三、特殊銀行ヲシテ能ク其機能ヲ尽サシメ産業救済ニ努力セシムルコト
- 四、中央銀行ノ見返担保品並ニ供託金ノ代用物件ヲ拡張シ 且不動産金融ヲ容易ナラシムルコト
- 五、輸出資金ヲ豊富ニシ 輸出為替ニ対シ十分ナル便宜ヲ図リ 輸出ヲ増進セシムルコト
- 六、基礎薄弱ナル事業ノ整理ヲ為シ資金ノ需要ヲ節減スルコト
- 七、失業者ニ対スル救済ノ施設ヲ講スルコト